

# 日本の繰り返す歴史から学ぶ。 今は「教育力」を再生し、 国を豊かにする時



歴史研究家  
多摩大学客員教授

## 河合敦氏に聞く

坂本龍馬、織田信長といった歴史的な人物に関するこれまでの常識が、最近の研究により変わるかもしれない。こうした「歴史は変化する」という事実を前に、私たちは歴史から何を学べばよいのか。そして、現在のパンデミック、戦争、SDGsといった世界規模の大きな変革期において、活かせることは何か、また、価値観が大きく変化する若者にどのように向き合えばよいのか。歴史研究家で、多数の著書を執筆され、教育者としてもご活躍されている、河合敦氏に話を伺った。

## 歴史研究の魅力は「変化する歴史」

**村上** 先生は高校教師から歴史研究家になられました。その経緯や歴史研究家の魅力などを教えてください。

**河合** 私は、「金八先生」が好きでしたので教師を目指しました。そして、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を読んで感動し、日本史を専攻して教員免許を取得しました。ですが、最初に赴任したところが特別支援学校でしたので、日本史を教えることはできませんでした。そのため、独自に地域の歴史や先祖のことを調べて雑誌に投稿し、賞をいただいたりしていました。やがて高校で教鞭をとるようになったのですが、もっと深く知らないところがありました。やがて、定時制高校で教えていた時期は、昼間は学生時代のゼミの先生のところに行き、数年間勉強していました。そして39歳で正式に大学院に入学しました。

修士論文では、日露戦争の兵士の手紙を分析しました。兵士からの手紙はたくさん残っているのですが、家族から兵士にあてた手紙はほとんど残っていませんでした。戦地では持っていたのでしようが、戦争が終わったときに捨てて



しまったのでしよう。それが偶然、地元の資料館で、豊かな農家の古文書を見ていたときに、明治37、38年の兵士にあてた手紙の写しを200通ぐらい発見しました。昔はコピーがないので、自分が書いたものをちゃんと写している人がいたのです。その発見によって、地元の人を兵士に発信し、兵士が何を求めていたのかなどを論文にまとめることができました。誰も知らなかったことが倉庫の中に眠っていたりするので。そうした史料を発掘することで新しいことが発見でき、それによって「歴史が変化する」ということにとっても魅力を感じました。

歴史の研究をしている人にとってみると、先行研究に対して、新しい史料や視点から異なる見解を提示していきますので、「通説が変化する」のは当たり前のことですが、「歴史が変わる」という認識が、まだ一般的ではなかったので、テレビなどで話すとき大きな話題になりました。

## 「変化する歴史」との向き合い方

**村上** 時の権力者が都合の良いように歴史を塗り替えてきたこともあったでしょうから、研究により真実が徐々に明らかになることは頭では理解できますが、これまで信じていたことが信じられなくなるという不安を覚えます。私たちは、どのように「変化する歴史」に向き合えばよいのでしょうか。

**河合** 私が坂本龍馬を好きになったのは、『竜馬がゆく』を読んでからですが、当時の通説と現在の研究は全然違ってきます。たとえば、薩長同盟はもつと前にできていたのではないかと

か、龍馬は同盟の席にはいなかったのではないかと、といったいろいろな新説ができています。また、織田信長については、革新的で天才的なイメージがありますが、最近の研究では、そもそも天下統一を目指していなかったのではないかと、楽市楽座は他の大名もやっていたので、むしろ織田家は後進的な大名だったのではないかと、というように大きく変化してきています。龍馬や信長に憧れている人は多いと思いますが、歴史は変わるものという認識を持ち、新しく変わった歴史から学ぶということだと思います。また、フィクションである文学作品のなかの主人公のセリフを座右の銘にしている方もいると思います。私もそうですが、『竜馬がゆく』のような小説が人生の励みになるのならば、史実とは切り離し、自分の心の糧にすることでよいのではないのでしょうか。

歴史学の研究というのは、過去の真実を明らかにする作業までです。その先の史実をどのように活かしていくか、というのは歴史教育の分野になります。歴史研究家の中には、歴史を教訓として学ぼうとするのは邪道だとまで言われる先生もいますが、私はそうは思いません。歴史は結構同じようなことを繰り返していますので、歴史を学んで、自分の生き方とか社会の将来に活かしていくということは、とても大事だと考えています。

## 歴史からみた日本人の特徴

**村上** 歴史からみて、日本人の特徴はどのようなものでしょうか。

**河合** 島国ということからかもしませんが、外から入ってくるものに強く反応する傾向があると思います。何か得体の知れないものに対して、過剰なまでに警戒しますが、納得するときと忘れちゃいます。幕末に外国人が来たときも尊王攘夷といって大騒ぎしたのですが、実際に付き合いが始まってしまつと、むしろどんどん積極的に外国を見習うようになりました。最初のアレルギー反応はとにかく凄いものがあります。コロナも、当初海外から入つてきて、死者がそれほど多くない時期から大騒ぎしましたが、もう大丈夫となると、マスクも一気に外してしまつてはいませんか。

また、適用力があるように思います。戦国時代と江戸時代以降とは異なるのですが、戦国時代は、自分の判断で比較的自由に敵味方に分かれるなど、機敏で柔軟な対応をしています。江戸時代の260年間で、かなり現代の日本に近くなつてきます。官僚機構が制度化された江戸時代は、なかなか柔軟な動きがとれなくなってきました。たとえば、町奉行には、3千石の旗本レベルの家柄でないとなれないといったことです。この制度が続いていると、人材が枯渇してきますので、八代将軍吉宗のときに、「一足高の制」を制定し、役職についているときだけ3千石を払うことで、5百石の旗本であっても町奉行に抜擢できることにしました。また、十一代将軍家斉は、「昌平坂学問所」という最初の官立の学校を設立し、試験で優秀な成績の人を抜擢するようにするなど、硬直した制度の中でも、時代に応じて柔軟に対応しています。



## 変革期の組織運営

**村上** 明治維新では多くの若者や下級武士が活躍しました。なぜそのようなことが起こったのでしょうか。

**河合** 制度的には硬直していた江戸時代ですが、その素地はこの時期にありました。藩主が藩政改革を宣言して、その責任者には中下級武士や庄内藩のように商人を据えろといったように、藩主の権限で有能な人物を中心に置いて改革を断行しています。もちろん失敗すると、藩主ではなく、抜擢された人物が全責任を負わされる

ことにはなりますが。つまり、企業のトップが、思い切って優秀な若手に全権を委任するようなことを、むしろ硬直的な制度の江戸時代でやっているのです。

たとえば、薩摩藩の島津忠義という藩主は、当時父親の久光が権限を持っていましたが、久光には知らせないまま、家老レベルの小松帯刀などに西郷たちを自由に活動させていました。つまり、有能な若手に思い切って権限を委譲することで、変革を起こしてきたということになります。

後継者の育成という面でも、江戸時代は血筋にはこだわっていませんでした。家柄は大事にしますが、自分と血が繋がっていなくても、養子を迎えて家を存続させてきたのです。子供の死亡率が高かったこともあったのでしょう。家柄はともて大事にしましたので、むしろ養子に入った人の方が緊張していました。たとえば、会津藩主の松平容保などは、自分が養子に入ったことで家を貶めてはいけなないと考えていました。血筋よりも家というものがよほど重いものだったようです。この感覚は、現代人にはなかなか理解できないかもしれません。ただ現在、事業承継者がいなくて黒字廃業するという話を聞くにつけて、せっかくの技術力がもったいないなと思います。

**村上** 現在は、パンデミック、戦争、SDGs など世界的な大きな変革期にあると思います。将来歴史的にはどのように評価されると考えられますか。

**河合** 歴史が大きく変わるの、クーデターのような政変や戦争とか災害がきっかけです。た

とえば、今回のコロナによって、人との接触が少なくなるだけではなく、一気にオンライン会議や在宅勤務などが普及し、実際に人と会わなくても仕事ができるようになりました。このように疫病の流行は社会を変えてしまいます。コロナ禍は、20年後には間違いなく歴史の教科書に載っていると思います。ともあれ、非常にどう対応できたかということが重要だと思えます。いつの時代でもそうですが、歴史が大きく変化するとき、柔軟に対応できないと生き残れないというのが歴史の法則なのです。今回も、補助金で一時は凌げても、社会は元には戻らないと思いますので、変化した社会に柔軟に対応することが大事になってきます。

## 教育現場からみた日本の危機

**村上** 教育者として若者と接してこられて、感じることを教えてください。

**河合** 年々「学ぶ意欲」がなくなってきていることに強い危機感を感じています。将来が見えてこないでしょう。給料も上がっていませんし、夢を描けない世の中になってきていると思います。まずは、学びたいのに学べないという状況を変える必要がありますね。貧困のために学校できちんと学べないと、人生の意義や、生き甲斐をしっかりと見出せないまま、利根的な快樂だけを求めるような大人になってしまいかねません。

日本ほど大学に行くのにお金が必要な国はありません。徐々に改善されてはいますが、今でも裕福でないと私立大学には行けません。親の

年収が一番高い大学は東大で、次が早慶、上智などのです。ヨーロッパ諸国では、優秀ならばいろいろな奨学金があり、自由に入学できるので、日本の奨学金はそのほとんどが、返済しないとならないものです。私も12年間教員を務めると返済しなくてよくなる奨学金を利用しましたが、今はその制度もなくなりました。また、貧困家庭の割合が増加していることは大きな問題です。無料塾や、こども食堂で夕飯を提供するということが各地で行われています。裕福な家庭に補助する必要はありませんが、こうした家庭の子供が学べる環境を政府や自治体などが急いで整備する必要があると思います。

あとは、「自尊心」が低くなっています。「どうせ自分なんか」という若者が近年結構増えています。この解決策としては、子供のときに「偉人伝」を読ませることが良いと考えています。たとえば、渋沢栄一は、徳川家康や豊臣秀吉などが大好きで、読む本の多くが偉人伝だったよ

うです。後に自伝の中で自分と偉人が友達のようになっていると語っています。岩崎弥太郎も、『三国志』の英雄に憧れて、自分の庭に日本列島をかたどった石を置かせ毎日それを眺めていたそうです。字が下手だと友人に言われたときには、自分は将来偉くなって字の上手な人を雇うからいいんだ、と言いつ返したように、偉人伝は、偉人と対等な感覚になる効果がありますので、自尊心が育ちます。私自身も、高校生で『竜馬がゆく』を読んで、「竜馬のようになりたいな」と思ったことが大きいですし、偉くなった方々に聞くと、やはり子供時代に「偉人伝」を読んで大志を抱くことが多いようです。

## 価値観の急速な変化

**村上** 若者の価値観の変化が速すぎて戸惑います。

**河合** 家族、結婚、人生などについて、価値観

が大きく変わってきています。これは、インターネットやSNSの発達によって、これまでは隠されて触れることがなかった情報も拡散されるようになったことも一つの要因ではないかと考えています。YouTubeになってお金持ちになるといった、お金に対する思いはそれほど若者も変わっていないのですが、自分が出世して偉くなるというようなイメージは描けないのではないのでしょうか。

歴史的にみると、特に戦国時代は、誰もが武將を目指していたと思われがちですが、お金持ちになりたいといったことも結構書かれています。秀吉のような武將を目指す人だけではなく、有徳者という豪商のようなお金持ちになりたいという人たちもいて、結構千差万別でした。現在は、出世というよりも、自分が満足できることをやりたいという感じになっています。

同じように、私たちの世代の感覚と若者の感覚がかなり違うということを経営者は理解した方がいいと思います。若者とのコミュニケーションのなかで分かってきたのですが、たとえば、「お酒を飲みに行こう」と言われてうれしそうに思う人はいません。若者は、コロナで飲み会がなくなり、ホッとしているのではないのでしょうか。気兼ねなく仲間同士で飲むのはいいのですが、上司に気を使って飲むお酒は美味しくないのでしょう。自動車への価値観も変わっています。自動車を持つというのは、以前はステータスでしたので、高級車に乗りたいと思う人が多かったと思いますが、今はそうではありません。若者は免許さえ取ろうとしません。

日本と韓国は、政治的な対立がありますが、



## 河合 敦 (かわい あつし)

1965年東京都生まれ。1989年青山学院大学文学部史学科卒業。1989年より、東京都立町田養護学校(現都立町田の丘学園)、小岩高校定時制課程、紅葉川高校、白鷗高校に勤務。その間、2005年早稲田大学大学院修士課程修了、2011年同大学院博士課程満期退学(教育学研究科社会科教育専攻・日本史)。2013年私立文教大学付属中学・高等学校で勤務の後、2016年退職。現在、多摩大学客員教授。早稲田大学非常勤講師。高校教師27年の経験を活かし、講演会、執筆活動を精力的に行うほか、「世界一受けたい授業」(日本テレビ)のスペシャル講師など、テレビでも日本史を解説している。第17回郷土史研究賞優秀賞(新人物往来社)、第6回NTTTトーク大賞優秀賞受賞。著書に、「早わかり日本史 時代の流れが図解でわかる!」(日本実業出版社、1997年)、「日本史は逆から学べ」(光文社知恵の森文庫、2018年)、「逆転大名 関ヶ原からの復活」(祥伝社新書、2019年)、「殿様は「明治」をどう生きたのか」(扶桑社文庫、2020年)、「教科書に載せたい日本史、載らない日本史」(扶桑社新書、2021年)、「渋沢栄一と岩崎弥太郎」(幻冬舎新書、2021年)ほか多数。



日本の若者は、韓国の魅力的なコンテンツを作り出す力を尊敬しています。政治的な対立とは関係なく、良いものは良いと国境を越えてしまっているわけです。

結婚観もかなり変わってきています。結婚すること自体が面倒だし、メリットを感じていないのだと思います。世界全体で、育児は自分の人生にとって重荷になるという感覚が強くなっている感じがします。中国や韓国でも同じですが、個人主義が浸透してきています。育児には、お金と手間がかかり、女性の仕事のスキルアップが止まるということで、出産・育児のメリットを感じられないのでしょうか。

**村上** 最近のSDGsの動きを若者はどのようにとらえていますか。

**河合** 「誰かの役に立ちたい」と話す若者は多くいますので、世界的なSDGsの流れにはマッチしていると思います。都立高校ではボランティアという学習活動が入ってきています。こうした経験によって、彼らの中で我々世代とは違う価値観が生まれるのではないかと思います。NPO団体などで、上下関係で縛られない自由な活動が展開されていますので、縦のつながりよりも横のつながりを大事にするという傾向が強まっていくのかなと思います。それが今後具体的にどのような仕事と結び付くかはかなり難しい部分ではありますが。

**村上** 現在の日本は、先行き不安から個人は貯蓄、企業は内部留保を蓄える傾向にあります。

**河合** 江戸時代の江戸っ子は、どうせ火事で燃えてしまうので財産をほとんど持つことなく、レンタルで済ませ、せつせとお金を使っていたようです。江戸っ子も将来が不安だったと思いますが、火事になっても生活が変わらないような行動をとっていた、ということだと思います。現在では、当時と事情は全く異なりますが、何かあった場合でも変わらず生活できるという社会システムを構築しておくと思心して消費するという点では同じだと思います。他方、当時の地主は、貯めたお金を消費に回すのではなく、相続税のかからない土地をどんどん増やしてきました。現在にあてはめるとすると、たとえば相続税を大幅に引き上げると、消費に回るのではないのでしょうか。

また、価値観が変化することで、消費の仕方も変わってきています。1匹3万円のメダカが売れているようです。安いメダカを100匹売

るよりも、1匹3万円のメダカを一人に売る方が、収益性が良い場合があります。個人の価値観が多様化していますので、お金の使い方も変わってきています。作る方は大変だと思いますが、多種多様な価値観に応えるような仕組みに変えるといいのかなと思います。

## 日本の歴史から学ぶこと ——教育力の再生と経済成長

**村上** 日本の歴史から現在に活かすことは何でしょうか。

**河合** 日本は、資源がないなか教育だけで成り立ってきたのに、なぜか政府が国民の教育にお金をかけないという不思議な状態です。このため、「教育力」の低下が危機的な状況です。たとえば、私は、早稲田大学で教職の科目を教えています。以前は、早稲田大学で教職の科目を教えるに減っています。以前は、定員50人の教室が満杯でしたが、現在は3分の1とか4分の1に減っています。授業の人氣がないのかと思って調べたところ、教職を希望する学生自体が減っているのです。教員試験の倍率も、私が教員になったときは40倍でしたが、今は2倍を切っている自治体もあります。やはり倍率が高いと比較的良い人材が採れると思いますが、今は先生になりたい人がいない状態なのです。その原因は、教員の仕事が忙しくなり過ぎてしまったためだと思います。一般企業とは異なり残業代が全くつかないなか、有休は一般企業と同じ期間しか取れなくなりました。8割が過労死レベルの労働をしていると言われる実態を聞くと、若者は

### 繰り返す歴史と克服の歴史

繰り返す歴史	克服方法	内 容
少子化	経済成長	飢饉などによる経済停滞が人口を抑制してきた。子沢山でもゆとりある生活を送れるように、国を豊かにする。加えて現代では、育児も男女平等にシェアするという意識の浸透が不可欠となる。
政変、戦争、災害	適応力	大きな環境変化は、自然淘汰を促進する。生き残りをかけた大胆な適応力の発揮が求められる。

### 克服に必要な「教育力」の再生

企 業	大きく変化する若者の価値観をよく理解し、本音で向き合うことをおそれず、長い目で育成する。
個 人	親の財力とは関係なく、学びたいものが学べる環境を整備し、危機的な教育力を再生するため、学生と教育者に積極投資する。

教師になりたいとは思いませんよね。子供を育てる人材の層が薄いと、日本の将来は厳しいですよね。「教育力を再生」するために、国としてもっとしっかりと投資しないと、大変なことになると思います。

それと、「人材育成力」だと思います。吉田松陰は、「とにかく人には愚か者でも優秀な者でも一つ二つは才能があるので、それを必ず見抜きなさい」と言っています。しかも彼は、見抜いた才能を文章にして直接本人に伝えていきます。たとえば、10歳の耕作という門弟が、正月の三が日に授業をしてください、と訪れて来た

ときのことです。当時正月の三が日に授業などはしませんでしたので、普通であれば何を言っているのだと叱るところですが、松陰は、「よく来た。正月に授業をしてくれと言ってきたのは君が初めてなので、君は子供たちの先駆けだ。子供の先駆けということは、全ての人の先駆けだ。まだ10歳なのにすごい」ということを手紙に書いて本人に渡しているのです。社員との信頼関係ということをよく聞きますが、社員の才能を見出して、ここがすごいと手紙に書いて渡すと、今の若者も頑張ろうという気持ちが生ええると思います。

今の若者が、ギブアンドテイクで割り切り、すべてのお金で動くという考え方は間違っています。むしろ経営者の方が、面倒だからと短期雇用の形態で都合良く使おうとしている面はないでしょうか。良いところを見出して能力を發揮できる場所に配置したり、よく話を聞いて社長の目指しているものを納得してもらったりして、長い目で育てていくことが大事だと思います。声をかけてもらっただけでも若手社員にとってはうれしいことだと思います。吉田松陰の松下村塾の塾生たちがあれだけ国を動かしたのは、やはり松陰の教育の賜物だと思います。若者に結構遠慮したり、辞めてしまうのではないかと気遣ったりしている経営者や上司も多いと思いますが、本音

でぶつかって話することを避けたい方が良いのではないのでしょうか。

もう一つは「少子化」です。歴史的には、家計的に育てられる範囲で育ててきたという感じだと思います。大名のような場合を除き、3〜4人が普通だったようです。

実は、江戸時代中期以降は、飢饉などで人口は停滞していたのですが、後期に急激に人口が増加して、若者人口が一気に増えました。若い世代が増えると、相対的に上の年齢の割合が減るので、革命などが起きやすいようです。明治維新もその若者のエネルギーが生み出したという学術もいます。実は、後期の天保年間に人口が増えた理由ですが、飢饉が数年間あったのですが、それ以外の時期にかなり生産力が向上し、経済成長が著しく、国力が上がっていたためなのです。北前貿易がさかんになり、ニシンや干鰯などの肥料が入ってきて、生産力が上昇し、豊かになったので、子沢山でも育てられたのです。現代日本でも、少し前までは豊かで、夫の働きだけで家族全員を養うことができていました。したがって、歴史的にみると、「国を豊かにすることは、少子化を克服する」ことになるのです。ただ現在は、豊かになるだけでは不十分で、女性は結婚して子供を産んで育てるといった常識は変化し、男女が協力して一緒に育て、女性も社会で活躍するという形に変わっています。そうしなくてはなりません。

**村上** 本日は、変化する歴史との向き合い方や、歴史的な激動期において、日本の歴史から学ぶべきことなど、非常に有益なお話をありがとうございました。